【研究ノート】

太平洋戦争下における留日中国学生の夏季錬成団

見城悌治

はじめに

清国政府が、留学生を日本に初めて公費派遣したのは、日清戦争の敗北を承けた一八九六年のことである。爾後、留日学生は増加の一途をたどり、日露戦後には、一万人もの中国留学生が修学していたとされる。その中から、辛亥革命の担い手となる人物が輩出されるなど、日本留学経験者が中国における近代国家形成に大きな役割を果たしていったのは、周知の通りである。[1] しかし、その後、対華二十一ヶ条要求、さらには満州事変、日中戦争勃発が、両国間に亀裂をもたらし、留学生数は減少していく。

しかしながら、看過できないのは、日中戦争また太平洋戦争下においても、日本で学ぶ中国留学生は存在し続けたという事実である。具体的な数字を挙げれば、日中戦争勃発前の一九三七年六月の調査では、中華民国籍学生が三九九五名（満州国籍一九三九名）、翌三八年六月の数値はさすがに激減するが、それでも一五一二名が国内で学んでいた（ちなみに、満州国籍者は、一六二〇名と微減で収まっている）。一九三九年にはさらに一〇〇

五名（満―一三二二名）まで減るが、一九四一年六月には一四六六名に復する（満―一〇五〇名）。一九四二、四三年度でも一三〇〇名台を保つものの、一九四四年四月の調査では、一一一八名と、また減少に転じた[2]。

つまり、一八九六年から始まった中国留学生の日本との「接触」あるいはその「体験」は、五十余年もの間、それぞれの時代状況を受けつつ、積み重ねられ続けたのである。筆者は、これらの「体験」を日中人士の相互認識や文化交流の観点から検討していくことに、現在の関心を置いている。そのため、千葉大学医学部・薬学部の前身にあたる千葉医学専門学校（のち千葉医科大学）や千葉大学園芸学部の前身にあたる千葉高等園芸学校留学生の在学中の活動実態や帰国後の動静について[3]、また、中国留学生が、日本滞在時に培った日本認識について[4]、さらには中国留学生の「日本における近代体験」の一つとして、「海水浴体験」を考察する小論をまとめてきた[5]。

最後に掲げた拙稿では、千葉県南端の館山町（現館山市）で行われていた日華学会主催の「留日学生銷夏団」などを素材とし、当地での異文化体験や日本人との交流について扱った。この「銷夏団」は、一九四一年をもって終了するが、翌四二年は、群馬県水上村（現みなかみ町）に会場を移し、「錬成団」の形で実施されていく。さらに拙稿では「翌四三年は、山梨県河口湖に会場を移して実施したことまでは判明しているが、一九四四年以降の実態は分からない[6]」とし、一九四二年以降の実態については、簡略に述べるに留めた。

しかしながら、一九四二、四三年の「錬成団」についても、内実をある程度把握できる史料が残されている。またその後の調査で、「一九四四年以降の実態」も多少分かってきた。

そこで、本稿では、一九四二年から四四年までの状況について、改めてまとめ直し、太平洋戦争下における中国留学生に対する「錬成」の目的、留学生の反応などを限られた史料からではあるが、明らかにし、旧稿を補う

ことを目的としたい。

一　一九四一年夏までの「留日学生銷夏団」

最初にこれらの企画の主催団体である日華学会の説明をしておきたい。同会は、一九一八年五月に、小松原英太郎（文部官僚）を会長とし、渋沢栄一等の財界人を顧問として設立された団体で、「日華両国共同ノ福利ヲ増進シ、輔車相依ルノ一助トナルコト」（趣意書）を目指し、中国留学生に対する寄宿舎提供、経済援助、東亜学校（日本語予備校）の経営などを行い、のちには、実質的に中国留学生の管理機関としての役割も負った。また機関誌として『日華学報』を一九二七年から四五年まで発刊している。(7)

この日華学会が、夏休み中の留学生たちの慰安と学習補講などを目的とし、一九二三年から、千葉県館山で「留日学生銷夏団」を始める。その詳細については、旧稿に譲るが、ここでは、後論に関わる範囲で、その概要を挙げておきたい。すなわち、毎年百名ほどの中国留学生が夏季休暇中の約四〇日間に、千葉県館山に設けられた常設宿舎で、午前は日本語講義、午後は水泳指導を受けていた。またその期間中に有識者による講演会、周辺の見学旅行・学校訪問、あるいは館山町民を招いての懇親会なども設定されていた。

「銷夏団」の創始から五年目の一九二七年には、「吾等の目的が何の程度迄達せられたか（略）少なくとも保健、団体生活の訓練、社交の増進等に幾分貢献したるものと信ずる次第である。（略）本年は開場以前より希望者多く開場後一週日を出でざるに、既に満員の盛況を呈するに至りました」(8)との自己評価が与えられるまでになった。

実際、同年の報告書には、「寄宿舎満員のため、やむなく入舎を謝絶したる学生等は館山を中心として付近数町村に亘り、借家もしくは借間して避暑する者、数百に及び、しかも年々増加の状況を呈」[9]したとの記載さえ残るほどの盛況ぶりだった。

その後も順調に運営を続けていき、一九三七年度における銷夏団は七月二二日に開始する予定であった。しかし、その直前の七月七日に、盧溝橋事件が勃発する。日華学会側は中止を考えたが、館山町民からは「開催を歓迎し来りたると同時に、在京留学生中希望者相当ある模様につき」、七月二八日から始めた。参加者は四〇名余りであったが、八月一三日の上海事変勃発により、「帰京者増加し、食堂の維持に困難を来したると、且国交の見通しも困難となりたる為め」、八月一五日で、中止となった。ただ、十名余の学生は、その後も館山に残ったという[10]。

戦闘が続く翌三八年も、規模を縮小した上で、銷夏団が実施され（参加者は二四名）、翌年以降も継続された[11]。太平洋戦争直前の一九四一年夏の参加者は六一名で、例年と同じように日本語授業や「外国人の見た日本文化」などの特別講義を受けるとともに、安房中学校で、同中生や千葉商業生とバスケットの交歓試合も行っている[12]。

こうして十九年もの長きにわたり、館山を舞台に行われた「留日学生銷夏団」であったが、一九四一年の実施を最後に終了してしまう。

二　一九四二年、群馬県での夏季錬成団

1　開催地の変更とその背景

太平洋戦争下の一九四二年夏に至ると、日華学会主催の中国留学生向け夏季企画は、群馬県最北部の水上村に所を変えて実施された。

これについては、『日華学報』九一号（一九四二年九月号）が、「留学生の夏季錬成団」、「錬成団の感想」、「湯檜曽日記―女留学生の錬成」の三つの記事に分け、詳しい紹介をしている。その記載を基に、錬成団の実情を見ていきたい。

まず、海を臨む千葉県館山から、谷川連峰が迫る群馬県水上に転じた理由の説明は、次のようにされていた。

本会では、毎年学校の夏季休暇を利用して、千葉県館山の海岸に留学生を集め、銷夏の意味を兼ねた心身の鍛練乃至学事の補習を行ひ、学生相互の親睦並びに留日研学の助成の上に相当の効果を収めて来たものであるが、大東亜戦争勃発以来、共栄圏建設に粉骨挺身する友邦若人の育成といふことが特にその重要性を加へてきたため、且つは学生訓練の一般的情勢から言って、中国の留学生に対する訓練に於ても、今一層の教育的厳粛さが要望せられるに至ったので、既に昨年度臨海団に於て、相当の成果を認め得た教育的企画を本年は更に強調し推し進めて。留学生に対する言はば、初の錬成団を試みたわけである。

場所も千葉県の館山は種々の関係から本年は見合せ、外国人の旅行、食料の配給等色々の点に於て、不都

合の少い東京府下に最初候補地を求めたが、恰好な処が見つからず、結局少々の困難は克服しても、といふことで、山紫水明の奥利根、水上の温泉郷まで、出かけることとになった[13]。

この説明によれば、「（大東亜）共栄圏建設に粉骨挺身する友邦若人の育成」が焦眉の課題になってきたこと、しかも「一般的情勢から言って、中国の留学生に対する訓練に於ても、今一層の教育的厳粛さ」が求められるようになったことが、館山の地を離れた理由と受けとめられる。確かに、銷夏団は、「学生相互の親睦並びに留日研学の助成の上に相当の効果」があったとの評価も挙げられているが、「親睦」の裏面には慰安娯楽というニュアンスも読み取れないわけではない。そこで、そうしたイメージがある臨海合宿が忌避され、「錬成」の色合いを濃くする必要があったかに思われる。

またこの文章では、「種々の関係」から館山を離れたと曖昧化されているが、筆者は館山に軍事施設があったことも、その理由の一つと推測している。たとえば、一九三九年の銷夏団員募集の告知中、「携帯品」について、「薄被褥（或毛布）、蚊帳、遊泳表、書籍、運動具及楽器等（房州因要塞之地、請不必携帯写真器）[14]」との文言が含まれ、「要塞の地」館山での写真撮影が禁止されていたことがわかる。一九三四年の銷夏団では館山航空隊見学の機会が用意されるなど蜜月期もあったのだが、日米開戦後には、こうした軍事的事情が問題となった可能性は否定できない。

一方、群馬県水上が選ばれた積極的理由については明瞭な説明がない。同地は「錬成するのに適当な山紫水明の地」という十分条件を満たしてはいるものの、一方で「恰好な処が見つからず」という消去法的な選択であった可能性も高い[15]。

2　「錬成団」男子班の概要

館山の「銷夏団」は、男女学生が基本的に同じ地で「親睦並びに留日研学」を行っていたのだが、群馬では同じ水上村内ながら、異なる場所でそれぞれの錬成をする形式がとられた。

男子班は、八月一日から十四日まで、群馬県利根郡水上村湯原の水上国民学校内練成道場で行われ、一方、女子班は、八月二日より十一日まで、水上村湯檜曽（ゆびそ）の近藤方を借りて実施されている（湯原と湯檜曽は、国鉄上越線で一駅、四キロ余り離れていた）。

まず男子班の内容から、紹介していこう。[16] 宿舎や訓練の性格から、定員を四十名としたが、募集後ただちに満員となり、その後の希望者を断るほどの盛況だった、と言う。

七月十八日には、日華学会に団員全員を招集し、訓示や諸注意を行い、さらに同仁会病院で、身体検査を行い、錬成に耐えうるかのチェックがあった。

最終的な参加人数は、三十八名で、東亜学校高等科[17]九名を先頭に、法政大学八名、東亜学校正科五名、東京工業大学三名、明治大学三名、東京高等師範学校三名、日本大学二名、東京帝国大学一名、早稲田大学一名、中央大学一名、専修大学一名、東京高等農林学校一名と、すべて東京府内の官立私立学校に属する留学生であった。

さて、二週間にわたる錬成の基本日程は、左のように定められていた。

五時三十分　起床、掃除、洗面。／六時　朝礼、体操。／六時三十分　朝食。／七時三十分　日本語講座。／八時四十分　文化講座。／九時四十分　自習時間。／十時十分　剣道。／零時　昼食。／一時　午睡、自由時

間、入浴。／四時　教練。／五時三十分　夕食。／六時三十分　詩吟。／七時三十分　座談会。／九時三十分就寝。さらに「随時付近の名勝旧跡を見学」するという企画も用意されていた。昼前に「剣道」の実習があったのは、「錬成団」ならではの特色と見てよいだろう。

朝一番で実施した「日本語講座」では、泉喜一郎「随筆二題」、井上誠之助「文法上から見た日本語」、鈴木正蔵「日本のうた声」が講じられ、また「文化講座」では、千田九一[18]「現代の日本文学」、湯浅明[19]「日本の細胞学」、森川智徳[20]「日本の仏教」、藤田重行「戦争論」が実施されている。

この二週間にわたる錬成期間の特記事項は、次の通りである。

八月三日　写真協会の瀬下綱良氏来訪。錬成の様子を撮影するとともに、夕食の席で、写真に関する講話を行う。夜、中村万吉水上国民学校長の厚意で、映画「黒潮躍る太平洋」を鑑賞。

八月四日　夜、中村校長を囲み、座談会。

八月五日　水上国民学校生徒一同と対面。また、沼田町に行き、男女中等学校および青年団の招待会に出席。

八月六日　夜、近沢日華学会教育部長、森川智徳東亜学校教頭その他を囲み、座談会。

八月八日　小学生と合同して、閲兵。運動会の催し。のち、湯檜曽の女子班も合流し、十時三十分より講堂で日華懇親音楽会を開く。席上、森川教頭の講演。昼食の折、団員交々意見発表。

八月十日　午前、谷川温泉へ行く。午後、青年学校生徒の銃剣術を見学。終了後、座談会。金子氏講演。

八月十一日　利根郡西部各国民学校長十氏来訪。昼食を共にし、歓談。夕食前、中村校長から付近の地理沿革について説明される。

八月十二日　清水トンネルの見学。越後湯沢まで遠足。
八月十三日　午後五時半、記念撮影。期間中、種々厚意にあずかった地元十七氏を招待し、会食会を行う。
八月十四日　午前八時、校庭に参列の上、学童と別れ、九時半発の列車で帰京。

さて、運営に慣れていた館山での銷夏団から、一転して山間部で行った錬成団は、果してうまく行ったのであろうか。まずは、男子班の「錬成」について、日華学会側の総括コメントを見てみよう。

二週間をふり返ってみるに、初めての土地で初めての錬成ではあり、且つは年とともに愈々強化される戦時統制的諸事情もあって、外国人たる留学生の錬成といふことには、関係者にとって相当の苦労があった。特に食料については、石井清太氏其他が随分骨を折り、奔走したが、あまり思ふ様にはいかなかった。錬成だから食料なんぞ問題でない、と言ってしまひたいところだが、留学生に対する錬成の効果といふ側から言って、幾分考慮の余地は残ると思はれる。宿舎も人数の割にしては好適とまではいかなかった。錬成の日程、指導の方法、人員の銓衡其他についても、対中国人の場合として、かなり批判検討されるべき点をもってゐたことは否めない。これは今後にかかる我々の問題であらう。

しかし、留学生は概してよくやった。指導者の熱心さに応へて、或る場合には日本学生に劣らぬ程の成績も示している。さまざまな学校からの寄合世帯だった上に、右の様な特殊な事情も手伝って、幾分の不統一や不首尾は一応やむをえなかったこととして、今後の努力と心構へとの如何によっては相当の成果を期待してよいであらう。[21]

ここでは戦時統制下ゆえに、食料調達に苦労した点が「考慮の余地」ありと、真っ先に指摘されている。さら

に、詳細は不明ながら、錬成の方法等について「かなり批判検討されるべき点」があったとの反省が打ち出されていた。つまり、「特殊な事情」はあったものの、「不統一」「不首尾」が目立ったというのが、主催者側の結論だったようである。

『日華学報』誌（一九四二年九月号）には、錬成団に参加した留学生五名の感想が載せられている。それらの概要を紹介することで、「不首尾」の一端および学生たちが受けとめた「成果」を垣間見たいと思う（なお、以下の五名はすべて所属学校と実名が明記されているが、本稿では、すべて記号化して示すこととする）。

［Aくん］

都会以外の生活に接する機会を望んでいた時、「東京を遠く離れた静かな山水の名勝であり、又日本でも有名な温泉の多い水上を場所として、留学生四十人ばかり集めて、二週間だけといふことである。私は勿論早速申込んでゐた」。

水上に着くと「大自然の景象が直ぐに目に映って来る。どれだけの魅力を持ってゐるかはよく知らないが、とにかく自然の神秘、故郷への思慕などといふ気持ちが胸に湧いてくるのを始(ママ)めて感じた。人力の錬成の為にこっちに来たといふより、寧ろ自然の薫陶の為に来たといった方が好かろうと、私はその時実にさう思ったものである」。

感想としては、「一　錬成団自体について。各班の組織を有系統的にすること、見学をできるだけ多くすること。二　日華親善について。日本の方々に中国人の本来の性質をよく紹介してもらふこと、日本人の親切によく感心すること。三　場所について。この次もこんな山水の多い所へ行くようしてもらいたいこと」が挙げられて

いる。

［Bくん］

「ほんの短期間ですが、本当に愉快に過ごしました。大東亜戦争は始まり、時局重大の折柄、随って、新秩序建設の中堅として期待される我々留学生も、旧来の休暇、単に銷夏の気持ちで我が儘に海水浴などするばかりでなく、愈々今年から錬成団の組織となって来ました。場所は（略）山明水秀、身心を鍛へ上げるには、理想的な好い所で、誠に申分は御座ゐません。私達は全く新聞に書かれた通り、『吾々は今日から中国の兵営に入った気持ちでしっかり遣ります』とつくづく感ぜられた」。

良かった点は「毎日の生活は（略）規律化され、日々を楽しく暮らしました」。「銃後の農村及び教育の出発点としての国民学校等に関して余程知りたかったが、そんな機会は許されなかった。（略―今回水上国民学校や当地の青少年団などから招待をしてもらい）座談会とか歓迎会は幾度も催されました。御互に打明けて聞いたり聞かれたり意見交換等をするのは、真に両国の人士が将来好く遣って行かうと云ふ心構へを持つためにはぜひ必要なことで、本当の親善的象徴はこの場面に現れてゐるではないか、と直感した」。

不満な点は、「御菜の材料は極くみんなが嫌ってゐるものとか、滋養の少ないものとか、調理法は中華料理でなければ日本料理でもない。変な拵へ方と云っても差障へないほど不味くて仕方がない。大事な食事はお茶を濁し、到頭（ママ）外食困難な水上の町に出て方々骨を折って食べに行かねばならない事は、誠に遺憾千万であります」。

［Cくん］

感想は八つ。「一　村人、特に中村校長先生は大変親切です。二　食物は少ない。栄養不良。三　班長の選択

は好くない。同学の意見を尊重しない様なことがあります。四　のみや其他の虫が沢山居ります。夜眠ることが出来ない。五　新聞や雑誌などがありません。六　道場が小さく、団員が多く、空気が非常に悪い。七　外出見学の機会が少ない。八　学科と錬成は皆午前に終わり、午後は自由時間の方が良い」。

［Dくん］

「一　先生方に就いて。熱心であり、また色々なご指導をして御苦労であること。二　地方の情形について。国民学校校長や先生方が私たちに世話をし、ご迷惑をかけたこと、地方の人民、特に青少年国民は実に可愛くて親切であること。三　私たちの生活について。大変規律よく行われてゐるが、中には少数の人は団体生活の訓練に欠けてゐること。知識が増進し、特に細胞学と剣道が進歩した」。「最後にもう二つあります。即ち、一　日華学会の先生の或方はもっと我が国の人と接近交談してください。二　お国の小（ママ）国民教育はなるべく両国の歴史上の関係をやってください」。

［Eくん］

「日本は戦争の非常時に於いて、国民は全力をあげて戦争を致しまする最中に、私達留学生が特別な精神団体訓練を受け得るのは、実に感謝に堪えません。特に、この比較的出産物の少ない群馬県に於いて、私達のために色々の世話を下さいましたことは、忘れ難い感激です」。「中日親善と云へば、政治問題よりも個人交際の方が重要だと私は信じておりますが、今度地方の青年諸君や其の他の人達に接触すると共に、交際を始めましたことは真なる親善の実を結んだと云へるのであります」。

「私は本団に対する希望を申し上げます。一、本団の意義に対する理解程度に依って、団員を募集することを

希望致します。一、教官と団員と合宿することを希望します。その理由は人物を造ることは人格感化に依るのであります（編者注。これは宿舎の関係から難しかった）。一、維新後の政治と経済講座を設けることを希望致します。一、錬成証書を渡すことを希望致します」。

原史料ママ

現状において、戦時下の留日中国学生が日本に関して書き残した感想類は稀少な状況にあるため、だいぶ長めの紹介となった。「本音」と「建前」の見極めが難しい点もあるが、貴重な証言であることは間違いない。この感想と日華学会側の認識と合わせた上で、筆者なりに練成団の「成果」と「課題」をまとめてみるが、それは女子班の動向を紹介した上で、行うこととする。

3　「錬成団」女子班の概要

女子班の「錬成」の概要は、次のように簡略にまとめられている。

「同じ水上村でも駅としては水上より一つ先の湯檜曽、そこの民家を借りた。やはり静かな温泉地で、山水には恵まれていたが、男子の場合とはほぼ同様の不便はあった。実際に参加したのは、東京女子医専の三名と東亜学校の二名の合計五名で、男子の場合ほど厳しい錬成に重点を置いたわけではないが、男子班の講師が時折態々出向いたり、しばしば日本の学生や青年団との間に座談会を催したりして、種々興趣深い十日間を過ごした[22]」云々。男子班の日程は先に紹介したが、女子班については、日程の記録はなく、代わりに、実施内容として「講習、講演、作法、炊事、実習、見学、遠足その他」という叙述があるだけである。

しかし、十日間の諸行事については、引率者であった日華学会の池田朝子が、「湯檜曽日記―女留学生の錬

成―」の題の下、かなり詳しくまとめており、そこから、留学生の様子や日本人との交流について知ることができる。まず、女子錬成団の募集人数等だが、「大東亜共栄圏内に勉学して居る女子にも錬成に参加させてみようとの教育部長近沢先生からの御趣旨から、始(ママ)めての試みでもあれば、人数も少ない方がよからうとのお仰せに基づき、約十名程募集しました」とされる（実際には五名の参加に留まった）。また、その実施目的は明確に示されていないものの、男子同様「大東亜共栄圏」時代における「友邦若人の育成」という点にあったことは推測できる。

第一日目（八月二日）は、東京女子医専の留学生が「診療の都合上、三四日遅れる」ことになり、東亜学校在学生二名が、まず上野駅から群馬県の水上駅に向かった。「生憎の日曜の事とて、車内は立錐の余地もなく、持参のお弁当も食べる事が出来ないで、一同渇と餓えとを忍び」、何とか水上に到着した。しかし、その後は、「米麦、メリケン粉、味噌、砂糖、油など充分の御配慮を（引用者注―現地の人々に）戴くのみならず、東京でも一ヶ月数度しか入手出来ない肉類や鮮魚を隔日に配給を受けましたのは、並みなみならぬ県庁当局者のお骨折と感謝いたしました」と、現地での食料事情は悪くなかった旨を池田は記している。

八月四日は、湯檜曽駅から汽車に乗り、地域の中心地である沼田町へ出かけた。国鉄沼田駅では、沼田高等女学校の学生たち五十名が出迎えをした。また学校では「我が国の古典的な千家の茶道で薄茶」が供された。そして、この薄茶は「留学生には珍し気に、慣れぬ御馳走ではあるが、一生懸命に呑みほされてうれしかった」。ついで、「女子青年団を始(ママ)め、国民学校校長先生、女学校の先生、組合長、青年団長の方々と御一所に懐石膳を並べ」、昼食を取った。この日の献立は、「前菜　霜降トマト、向付　胡瓜(ママ)桃和へ、吸物　鶏肉茗荷汁、鉢肴　利根

鮎塩焼、煮物　南瓜隠元茄子、御飯　純利根白米、香の物　奈良漬茄子」であり、「今日の御馳走は利根で捕れた鮎を皆さんに差しあげたいのである、と目の下四寸もある様な大鮎で大層おいしくあった」と、地元食材の提供ともてなしの心に池田は感動の体だった。また昼食時に「座布団に坐はるので、足が痛くて御馳走も味ははれぬではないか、と内々案じたが、緊張していたせいか、それ程でもなかった様子でホッと致しました」との感想も残している。

さらにこの時、地元の「純朴な女子青年団長」が立って、「遠く父兄母姉との音信もままならず、不自由な中に燃ゆる希望を持って勉強にいそしむお客様を今日ここに御迎へが出来て、心からうれしく存じます。かうして御隣りの国の皆様と共に、太平洋を巡ぐる国の女性として、お互いがよく理解し、親しみあひ、凡べてを包擁する大きい「愛と力」によってこそ、大東亜の建設がなされる事と思ふ。まして留学生の皆様と今から培はれた友情こそは、一番強固な国際愛の根元である」と弁じたことを受け、池田は「何れも共通なるものを持つ事には心からのよろこびと感謝であった」と書き記している。

なお、この時の沼田高等女学校訪問では、あまりの歓待ぶりに感動した中国女学生Fさん（東亜学校生）が「此の親しみある雰囲気に感銘深く、私をして沼田高女へ入学させて下さい」と名乗り出る椿事さえ起こっている。そして、日華学会が彼女を入学させるべく「文部省や県庁と交渉の結果、遂ひに希望かなって、九月十日出発させました」というまったく予期せぬ結果が生まれている[23]。

さて、湯檜曽の錬成団では、毎日午前午後に分け、専門家の講話を聴くとともに、近隣の山野の跋渉を喜んで行ったという。また、八月七日には、関東と新潟を結ぶ鉄道トンネルの清水トンネルの見学にも臨んでいる。

湯檜曽滞在中は、「毎日女子青年団や沼田高女生は代るがわるおはぎやら果物、豆腐など下さるので、恐縮の余り御遠慮申すと、『留学生に食べさせて下さい』、『スキダと申されたから、持参した』と云ふ。其気持ちには、遠来の珍客をねぎらふには、どうしていたはらうか、どうして満足させてあげようか、今世界は大変動のまっただ中であるのに、現在ここでは親善になごやかな朝夕を続けて居る。こんな夢に見る様な場面が、私共日々の生活であったかと、小さな少女の胸にわくわくと波打つものが感じられ、思はず、目頭のあつくなるのを覚えた。（略）愈々明日は出発と云ふ晩、又会場にして下さい、おしる粉を差しあげたい、と女子青年団の一人が、日頃畑に出て努力した小豆と西瓜をさげて訪問され、総勢二十八名となって、音楽の交歓や郷土民謡、踊りを見せて下さった。（略）かくして夜のふけるのも知らず、別れを惜しみあったが、お話はいつ尽きる時もなく、湯の町は一しほ更けて、堰の音のみ強く響く頃、再会を約して散会した」云々と、引率責任者であった池田は、地元民への感謝と自らの感動を書き残している。

そして、池田による「湯檜曽日記」は、次の言葉で閉じられた。「此の報国団奉仕部隊（引用者注―さきほどの女子青年団などを指す）に答へるには、遺憾乍ら、留学生には今少し日本語の勉強をして戴いたならば、猶一層親密の度も増し、お互ひ精神的深味にも及んだかと思はれる。どうか、十日間の錬成を無にせず、お互ひあの意気込み、此の気持ちを永久に忘れないで、大東亜の新世紀を育てて行きたいと只管願ふ事である」。

4　群馬における「錬成団」の「成果」と「課題」

水上錬成団の男子班および女子班の概要は以上の通りである。現状で把握できている「錬成団」関連史料は他

にないため、客観性に欠ける憾みはあるが、これらの『日華学報』掲載の記事から、「練成団」の「成果」と「課題」をまとめておきたい。

まず、「成果」であるが、沼田高等女学校訪問を典型例とし、地元民との交流には双方得るところがあったようである。男子班Bくんの「（座談会などの実施は）両国の人士が将来好く遣って行かうと云ふ心構へを持つためにはぜひ必要」、Eくんの「中日親善と云へば、政治問題よりも個人交際の方が重要だ」という気持ちは、「大東亜共栄圏下の連携」という政治的事情を越えて、評価できることではないかと筆者は考えたい。また、山間地での実施であるがゆえ、「自然の薫陶」を受けることができた、との感想が残るなど、前向きな感想も多かった。

一方、最大の「課題」は、食料供給にあったようである。戦時下ゆえ止むを得なかっただろうが、「食べ物を探し、田舎町を駆け回らざるを得なかった（Bくん）」と聞くと、まさに遺憾千万であった（それに対し、女子班は引率者池田の感想を信じれば、差し入れが続々と寄せられ、男子班よりはましだったようだ）。また男子班からは「見学が少なかった」との意見も出されている。館山での銷夏団は長期滞在ということもあってか、諸学校や諸施設の見学が何度も企画されていた。それと比較すれば、確かに物足りなさがあったのかもしれない。

また、Dくんが書いた「一　日華学会の先生の或方はもっと我が国の人と接近交談してください。二　お国の小国民教育はなるべく両国の歴史上の関係をやってください」についてであるが、前者は、一部の講師が、中国学生と親しく交わらなかった事情を推測させる。また、後者についての詳細や真意は不明だが、千葉県館山で地元民との懇親会が最も盛り上がったさなか、地元の小学生が「チヤンコロ」と叫び、会場全体が不愉快な状態に陥ったという事件[24]を想起させるような出来事が、群馬でもあったのではないかとも想像する。

一方、女子班参加者のコメントは収録されていないため、参加学生の反応を推し量れる材料は、ほとんどない。そのためこちらの「課題」は見えにくいが、「日本語力がもう少し高い方が良かった」と池田が記している点のみをあげたい。

なお、男子班のBくんが「秩序建設の中堅として期待される我々留学生も、旧来の休暇、単に銷夏の気持ちで我が儘に海水浴などするばかりでなく、愈々今年から錬成団の組織となって来ました」との感想を書いていた。海辺から山岳地帯に場所を変えた理由について、先に多少の推測を記したが、参加学生の中にも、「海水浴を好むのは、わがままな態度」と見る思考があったことは確認できるだろう。

三　一九四三、四四年の夏季錬成団

1　一九四三年の夏季錬成団

群馬県水上村での錬成団開催は一年だけにとどまり、翌四三年は、山梨県船津村（現富士河口湖町）の河口湖畔が会場として選ばれた。その概要は、『日華学報』一九四三年一一月号所載の「留日学生夏季錬成団概況」から窺うことができるが、その冒頭に掲げられた趣旨説明は、次のようであった。

本会では、例年夏季休暇を利用し、各学校当局者の斡旋によって選抜せる留学生について、心身の鍛練を行ひ、日本の風物に親しましめ、留日研学の一翼として夏季錬成を行ひ、年と共にその成果顕著なるものが

あるが、苛烈なる決戦段階にある今日と雖も、留学生の指導育成は一日も忽に出来ないのみならず、今後留学生に期するところ、愈々大なるものがあるのに鑑み、特に留学生の錬成を必要と認め、種々の障害を排して、左記要項に依って、之を実施した。

一九四一年（およびそれ以前の）千葉県館山の「銷夏団」、そして四二年群馬県水上の「錬成団」の顛末を追ってきた立場からすると、過去二年の成果と課題への言及がほとんどないこの概説的文章には少々失望させられる。錬成期間が「昨年の二週間がやや長過ぎた感があるので、一週間とした」という引用部以外の叙述が、辛うじて変更の理由を推量させるくらいである。それ以外は寡黙に徹し、たとえば、一九四三年の錬成団開催を脅かそうとした「種々の障害」とは何なのか等は、不明なままである。それは食料調達の困難さなのか、参加学生の満足度なのか。当該号は、この山梨錬成団記事に、たった三頁しか割いていないため、残念ながら推測するための情報がほとんどない（ちなみに、水上錬成団の記事は十頁分与えられていた。初年度と二年度目の差であろうか）。

それらはいったん措き、山梨錬成団の概要紹介をしておきたい。この年は、専門学校以上の学校在籍者を対象とする「甲班」、東亜学校生を中心とする「乙班」の二グループに分け、それぞれ定員を三〇名と定め、募集をかけた結果、甲班は三一名、乙班も定員を充足したとされる（甲班に参加した留学生の所属大学・学校名の記載はされていない）。

この「一週間」という錬成期間を「甲班」は七月二五日から、「乙班」は八月一日から、それぞれこなしていった。内容展開には多少の相違が生じたものの、両班の日程の大略は以下の通りである。

第一日目。開団式。

第二日目。午前五時半起床。掃除。朝礼。行進。七時　朝食。午前八～十時　講義。午前十～十二時　教練。午後一～三時　課外文化講座。午後七～九時　地方青年との交歓茶話会。九時　点呼就寝。

第三日目。午前五時半～九時　同右。午前九～十二時　岳麓自然研究見学遠足。午後六時　夕食。七～九時　自習または茶話会。九時　点呼就寝。

第四日目。午前五時半～八時　同右。午前八～十時　講義。午前十～十二時　教練。午後一～四時　勤労作業。六時以降、同右。

第五日目。午前五時半～八時　同右。午前八～十時　講義。午前十～十二時　教練。午後一～三時　課外文化講座。午後八時　富士登山出発。

第六日目。富士登山。午後四時　下山帰着。

第七日目。閉団式。

ここで行われた「課外文化講座」の内容であるが、「甲班」は、関世男（日華学会嘱託）による「国史講座　国史を一貫する精神」、湯浅明（東亜学校高等科講師）による「科学講座　日本の科学の歴史」が供された。一方、「乙班」は橋本又治郎（大政翼賛会興亜総本部実践局輔導部副部長）による「日本の国体」の講演が行われている。さらに、木村新（東亜学校高等科教授）、有賀憲三（東亜学校正科教授）、浜中直樹（日華学会嘱託）が、それぞれ「日本語補習講座」を担当した。さらに、両班共通の講演、課外授業では、遠山秀雄（山梨県南都留翼賛壮年団）「枢軸国の青年」、中村平三（特殊研究者）「小鳥の研究」、小林高徳（山梨県郷土学会会員）「岳麓自

然研究の指導」、岩崎技師（南都留地方事務所経済課長）「勤労作業指導」、鈴木斉一（東亜学校高等科教授）「教錬」がそれぞれ行われた。

これらの実施内容について、主催者である日華学会側は自己評価等を次のようにまとめた。

まず、毎朝の行事については、「日華両国旗の下に於て朝礼を行ひ、次で付近の筒口神社境内まで駈足行進をして、紫に明けゆく富嶽の秀峰を仰ぎつつ、朝の爽やかな大気の中で体操を行」ったとする。また二日目の夜に行われた地元青年との交歓茶話会は「互いにうちくつろいだ気持で、問ふ者も答ふる者も談笑裡に応答尽くるところがなかった」。三日目の「岳麓自然研究」は、「炎暑であったが、一同之をものともせず、あるひは急坂を登攀し、あるひは密林中の難路を踏破したり、行程約二十キロにも及んだが、一人の落伍者もなく、次の富士登山の為にはよい足ならしの鍛錬でもあった」。四日目の「勤労作業」は地元青年と共同で「岳麓熔岩地帯の荒蕪地を開墾する作業であった。鍬の戦士としての数時間に、よい体験を味ひ、意気軒昂たるものがあった」。また五、六日目の「霊峰」富士登山については、「山の神秘に畏こみ、心身の汚濁を払ひ落した」と見る。

以上を簡単にまとめれば、「神秘に畏こみ」いる霊峰富士山周辺での錬成活動に、肉体的精神的効用が大いにあったと見ていることが窺えよう。また水上錬成団と同様、地元青年との交流にも力が注がれていたが、特に荒蕪地開拓を共同で実践し、「鍬の戦士」としての体験を実感させた点は、「苛烈なる決戦段階」で実施した錬成団ならでは特色であったろう。

参加した留学生はどのような感想を抱いたのだろうか。二名の作文が付載されているので、その要点を紹介したい。

［Gくん］

「時局下の『夏休みを国家へ返上しよう』との呼声が頗る高い現時に、夏季を利用して自然界に親しみ、身心を一層しっかり鍛錬しようと思っても、仲々機会を得られない此の際、日華学会が富士山麓に於いて、夏季錬成団を組織し、富士登山を計画した事は誠に留学生に対しての有難い親心である」。「一週間の堅実な生活を顧みて、どんなに自分は満足したか、全く此の筆で記すことが出来ないものである」。

そう述べ、さらに彼は四点の感想を列挙する。一つは、「今度の錬成の計画は全般的に非常に成功したことである。実に時局柄に相応しく、周到綿密な、然も留学生に良く向く計画であったと思ふ」。第二に、「宿舎は美しい景色を持った河口湖に臨んで、毎日富士を仰ぐことが出来」、「場所柄は非常に良かった」。「かういふ所であるからこそ、真に身心を陶冶することが出来たと思ふ」。第三は、「地方の人達が大変親切にして呉れたのに感服した」。第四に、富士登山の際、老幼男女が元気で登山するのを目撃し、「ここに日本人の頑張り精神と富士に対する篤い崇拝心が現れているのではないかと思った」である。

［Hくん］

「私は元師範教育を受けたから、当然色々と教錬や運動をしましたが、此の五日の間の様に一生懸命で鍛錬した事は未だありません」。「我等の錬成の中で、鈴木先生が教へる教錬、それは日本の魂であると言ふ刀剣を木刀であるけれども、それを手に取り実際に習ったのは、私にとっては幸であり、一番喜ばしい事でありました」。「私にとって一番記念すべく忘れ難いのは、勤労作業であります。天気は曇り小雨の降る下に、上着を脱ぎシャツ一つになって、村の青年と一緒にまじって、荒地を掘り返す其の風景、私は我を忘れて夢中になって働きまし

た」。「私は夏季錬成団に参加して、身心を鍛錬する外、昔の事（引用者注―貧しい家庭で育ち、幼時、昼は農業、勉強は夜しかできなかった過去）を憶ひ起し、これから以後を考へ、今後大いに努力がしたいと言ふ強い決心が定まりました。今度の錬成団は、実に記念すべき身心の鍛錬だと思ふ次第であります」。

一年前の水上錬成団の留学生の感想には、問題点の指摘や改善希望点も多く含まれていたが、こちらは二つとも企画を絶賛する内容であった。六一名の中から、選び出された模範文である故だろう。しかし、自発的な意志によって、「錬成団」に参加した学生であるとするならば、確かにこの日程・内容に、満足した者も居たのではないかと想像する。

たとえば、水上錬成団の総括中に、日華学会から、「錬成だから食料なんぞ問題でない、と言ってしまひたいところだが、考慮の余地はある」との弁明があった。「錬成ゆえ、厚遇する必要はないはずだが…」という本音である。しかし、参加留学生は、食べ物が「中華料理でなければ日本料理でもない」、「不味くて仕方がない」と手厳しい批判を残していた（長らく続いた千葉館山銷夏団では、通常、中華料理が供されていた[25]）。しかし、山梨錬成団の概要中には、「炊夫を同行、賄を自営とした」とあり、それは、おそらく中華の料理人を帯同し、参加者の歓心をかうことに努めたものと考えられる。

また、水上の参加者は、食料のみならず、「宿舎が狭くて息苦しかった」、「ノミなどが多く、夜も眠れなかった」等の住環境への不満も述べていた。それに対し山梨練成団の宿舎が「美しい景色」を臨むことのできる「河口湖ホテル第二別館一棟」に定められたのも、満足度を高めるための腐心であったと推察される。

そもそも参加を希望した学生は、Gくんのように「身心を一層しっかり鍛錬しようと思」う意識が強い人たち

であったことは想像に難くない。こうした諸要素や主催者側の硬軟取り混ぜた対応が、双方に「成功」という印象をもたらしたのだろうと考えていることは、先に触れた通りである。

2　一九四四年の夏季錬成団

一九四四年の錬成団について、『日華学報』誌（第九一号）は次のような報告文を残している。

時局の趨勢は学徒の通年動員となり、殊に夏季に於ては授業を廃し、学生・生徒をして工場その他の労務に服せしむる学校があって、留学生の多くは、之等労務から除外せられて、無為に在らしむるが如き状態なるに鑑み、且つは本会経営東亜学校に於ては、夏季休暇に入るを以て、この機会に於て、留学生の為めに心身の鍛錬を図り、一つは日本に対する見分（ママ）を拡からしめ、地方民情にも接せしめて、留学の使命達成上の一助ともしたいと欲して、留学生夏季錬成会の企画をしたのである。[26]

後半の三行に示されている主旨・目的は、水上および山梨錬成団のそれと同一であるが、一方前半の「日本人学生が勤労動員されている夏季に、留学生を遊ばせておくわけにいかない」という状況は、まさしく一九四四年夏の状況を映すものであろう。

そして、この年の錬成団は、三つのカテゴリーに分けて実施されている。

① 東亜学校正科学生対象。八月一日から十日まで。神奈川県大雄山最乗寺の宿坊に籠り、朝五時起床。体操、祈祷式参列の行事。七時半から九時まで日本語講義。九時半から十一時まで課外講話。午後は勤労作業、また鍛錬遠足などを行った。参加学生十八名。

② 東亜学校高等科学生対象。八月一日から十四日間。静岡県御殿場大乗寺で、文化講演会、教錬・体操などを実施した。参加学生二十八名。

③ 各種専門学校の女子留学生対象。八月一日から十日間。山梨県北巨摩郡小泉村無源荘にて、文化講座、鍛錬遠足、近隣農家への勤労作業、地方女子青年団、婦人会との交歓晩餐会などを実施。参加学生十八名。

さらに、日華学会の後援の下、八月六日から二六日まで、「中華民国留日学生仏教錬成団」（詳細不明）が大学および専門学校男子生徒二十名の参加により、島根県邇摩郡向西寺で錬成を実施したこと、終了後は、山陰・近畿地方を見学した旨の記載も付されている。

さて、高評価に思えた山梨錬成団を翌年も継続するのかと思いきや、この年に場所がまた変更されたのは何故なのだろうか。また、山梨錬成団が「成功」した一因には、「水上錬成団の二週間が長すぎたので、一週間に短縮した」こともあったはずだが、二週間錬成がここで復活している。その理由が、「労務から除外された留学生を無為に過ごさせるのを避けるため」の措置であったか否かは判然としない。

いずれにしても、学会側は、②に対して、「規律ある生活の下に心身の鍛錬を行ひ、所期の目的を達成した」という自己評価を下している。また③は、富士山や南アルプス連峰を望む「盛夏も暑熱を覚えない好適の地」を選定したことを自賛している。そして、これらの実施にかかり、「開催地の県及町村の各当局者は宿舎の斡旋に、食料の需給に其の他錬成上の行事に関し、特に懇ろなる御世話と便宜とをお与へ下さって、日華両国親善の実をあげ、此の企をして、一層有意義たらしめたる。洵に感謝に堪へない次第である」との謝辞を示すことによって、三頁余りの報告を結んでいる。

一九四二、四三年度については、参加留学生の「感想」が収録されていたが、一九四四年度はそれがなく、学生側の反応を窺うことができないのは残念である。また、それ以外の情報も少なく、格別のコメントを加えることもできない。

なお、『日華学報』第九一号は、敗戦後の「一九四五年一〇月二五日」に発行されたものであり、活版印刷ではなく、手書き（ガリ版）による三七頁足らずの小冊子に留まっていた。敗戦前後の混乱期では、その程度の誌面づくりが精一杯だったのだろう。なお、『日華学報』誌は、その後発刊されることはなく、結局、この九一号が「最終号」となった。

おわりに

日中戦争下においても、日本で修学を続ける中国留学生は千人を越えていた。その内実は「親日政権（傀儡政権）」からの公費派遣留学生が少なくなかったが[27]、また私費留学生もいた。そのあたりの事情について、現代中国の研究書はこう解釈する。すなわち、一部は先進的技術を学ぶことで、祖国への復興貢献を目指した。また中国の大学が、日本軍によって破壊され、あるいは内陸に移転したため、日本で学ぶ道を選ぶ人もいた。さらに、公費受給の可能性が高かったこと、「中国で一年学ぶ費用があれば、日本で二、三年学べた」こと、逆説的ではあるが、母国よりも安全であったこと、一部の学生は、「敵国の強さ」を知る目的を持っていたことなどが、日本留学を後押ししたと言う。「だからこそ、多くの留学生は、矛盾と複雑な心理を終始抱えていた」。「その行為

が中国国民の理解を得られないことを懸念していた」。「苦悶の心境は言葉に尽くすことができなかった」云々。[28]

確かに、日中交戦下の中国留学生の行動や心情を探ることはなかなか難しい。そうした中、日華学会主催の錬成団に参加した中国留学生の動向の概要を整理することも、そうした問題に接近するための一助になると考え、本稿はまとめられた。

錬成団を受け入れた地域の人々の懇切熱心な歓迎と交流は、留学生も日華学会も感激させたことは、一つの史実ではあったろう。しかし、同時代において、中国留学生たちが抱えていた苦悩や煩悶とそれらをどのように切り結んで評価していくのか。また、戦争勝利後、祖国に戻った留学生の中で、これらの「日本体験」がどのように咀嚼されていったのか。まだまだ多くの課題が残されている。

注

(1) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史稿』(一九三九年、日華学会)、『中国人日本留学史』(一九六〇年、くろしお出版)の先駆的研究から始まり、今日は多面的な研究がなされている。ここでは、大里浩秋・孫安石の編になる『中国人日本留学史研究の現段階』(二〇〇二年)および『留学生派遣から見た近代日中関係史』(二〇〇九年、ともに御茶の水書房)のみを挙げておく。

(2) 日華学会編『昭和一九年四月現在　第一八回中華民国留日学生名簿』一九四四年。各年版とも、その発刊年次から十年ほど遡った数値がまとめて掲載されていた。この名簿の昭和一四(一九三九)年版までは、満州国留学生数も併記されている。昭和一五年以降の満州国留学生数については、駐日満州国大使館編『満州国留日学生録』(各年版)から補充できる。

(3) 見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』二号、二〇〇九年、同「戦前期　留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』三号、二〇一〇年、見城「戦前期における千葉高等園芸学校の留学生とその動向」『国際教育』第四号、二〇一一年。

(4) 見城「日中戦争下における中国人留学生の生活と留日意識」『北東アジアにおける「記憶」と歴史認識に関する総合的研究』（平成一八～二一年度科学研究費　基盤研究（A）18202014　研究代表者　千葉大学人文社会科学研究科　三宅明正）、二〇一〇年三月。見城「一九二〇～三〇年代における中国留学生の日本旅行記―千葉医科大学留学生はキャンパスの外で何を見て、何を感じたのか」『人文研究（千葉大学）』四〇号、二〇一一年三月。

(5) 見城「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」『千葉史学』六〇号、二〇一二年三月。

(6) 前掲、見城「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」、一五〇頁。

(7) 砂田実編『日華学会二十年史』一九三九年。大里浩秋「目次『日華学報』」『神奈川大学人文研究所報』三八号、二〇〇五年。なお、『日華学報』の全九一号は、大里浩秋・孫安石および見城の監修により、二〇一二～一三年にゆまに書房から、復刻版が出されている。

(8) 張清鑑「房州たより／中華留日学生消夏団通告」『日華学報』第一号、一九二七年八月、一九頁。

(9) 日華学会編『昭和二年度　日華学会第十一回年報』一九二八年、一六頁。

(10) 日華学会編『昭和十二年度　日華学会第二十一回年報』一九三八年、一五～一六頁。

(11) 「館山消夏団」『日華学報』七〇号、一九三八年一〇月、三九頁。

(12) 「館山夏季臨海園」『日華学報』八五号、一九四一年一〇月、七七頁。

(13) 「留学生の夏季錬成団」『日華学報』九一号、一九四二年九月号、三七頁。

(14) 「留日学生消夏団通告」外交史料館所蔵文書「日華学会関連雑件　第三巻」【レファレンスコード】B05015269800。アジア歴史資料センターHP、H―〇二〇三―八九。

(15) この錬成団の引率者であった日華学会職員の金子近次が、水上村が属する群馬県利根郡の沼田中学校第一回卒業

生であり、地元に知り合いが多かったことも決定に何らかの影響を与えた可能性も指摘できる。「（金子先生は）村の校長さんや県庁の誰れ彼れが御同窓であったとかで、久し振りであったと大層よろこばれ、君は広義の教育方面にたづさはり居られたのかと、時局柄何かと不自由を察せられ、非常な御便宜をお計り下さったのださうである」云々。「湯檜曽日記」前掲『日華学報』九一号、三四頁。

(16) 以下の男子班の叙述は、前掲「留学生の夏季錬成団」三七～三九頁を参考にした。

(17) 東亜学校は、大学等の受験に備える日本語予備校であったが、「高等科」は修業年次三年、「正科」は一年と定められていて、留学生の日本語能力や受験校のレベルに応じて、学生が選べるような体制になっていた。

(18) 千田（一九一二～一九六五）は、中国文学者。竹内好・武田泰淳等の中国文学研究会に参加し、『中国文学』の編集などにあたった。

(19) 湯浅は、戦後、東京大学教授などを歴任した細胞学者。

(20) 森川（一八八〇～一九七〇）は、仏僧、哲学者。東京府立高（現首都大学）教授、東亜学校教頭などを経て、一九四六年竜谷大学学長となる。

(21) 前掲「留学生の夏季錬成団」三九頁。

(22) 前掲「留学生の夏季錬成団」三九頁。

(23) 男子学生の名前についてさきほど記号化したが、こちらも実名は伏せておきたい。さて、このFさんが沼田高等女学校に確かに入学在籍したことは、日華学会編『第一七回　中華民国留日学生名簿（昭和一八年四月現在）』から明らかになる。また、群馬県立沼田女子高等学校・同窓会名簿刊行委員会編『創立八〇周年記念・同窓会会員名簿（平成一二年度版）』二〇〇〇年、からも、その名前を確認できる。なお、後者には、一九四四年三月の卒業生として記載されている。

(24) 前掲、見城「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」、一四七頁。

(25) 同右、一四六頁。

(26) 「留学生夏季錬成」『日華学報』第九七号、二四～二六頁。以下の叙述も、すべてこの号からの引用である。

(27) 三好章「維新政府と汪兆銘政権の留学生政策」（前掲『留学生派遣から見た近代日中関係史』）などを参照。

(28) 曹必宏・夏軍・沈嵐『日本侵華教育全史』第三巻（華東華中華南編）の「留日教育」節、人民教育出版社、二〇〇五年、三九六～四〇三頁の叙述を適宜日本語に翻訳した。また、王奇生『留学与救国―抗戦時期海外学人群像』広西師範大学出版社、一九九五年、も参考とした。